

近江国坂田郡天野川流域における境目の城と 鎌刃城の歴史的 position(1)

— その考古学的検討 —

丸 山 竜 平

A Study of the Ruins of Kamanohajo of Sakata Gun in Omi Province (part 1)

Ryuhei Maruyama

はじめに

近江国坂田郡の南縁を西流して琵琶湖に注ぐ天野川流域の左岸、あるいは犬上郡の北辺山魂ともいうべき、湖北と湖東を境する山稜群は、中世戦国時代をとおして、北の雄浅井氏と南の守護大名佐々木六角氏が激しくその勢力の伸長を図り、鏝ぜりあいを繰り返したところであった。

そのためか、琵琶湖とその内湖に面して、また山間の中仙道に面するようにして、佐和山城、磯山城、太尾山城、鎌刃城、あるいはキトラ谷砦、ヤナガ谷砦、菖蒲嶽砦、物生山城、番場城等多くの城砦が目白押しに築造されていった。

それだけ激しく、また幾度にも及んでの変転する勢力の均衡、破綻に応じて、雌雄の激突、被官勢力の小競り合い、夜陰に乗じての乗っ取り作戦など、その戦いが多様な様相をもって、この狭間に展開されたことを有力に物語っているといえる。

小論が主題として取り上げる鎌刃城は、これら国境にあって陣取り合戦の対象となった「境目の城」群の渦中において、事実、「境目の城」の役割を担い、時には京極氏、ときには六角氏、おくれであるいは浅井氏あるいは堀、樋口氏の守るところとなり、ついには信長の手に落ちて、江北の侵攻に大きな役割を果たすことによって廃城に帰したのであるが、ここでの課題は、そのような「境目の城」をその前身、築城当初に遡って考察し、新たに別個の視点から、この遺跡の評価を果たそうとするものである。

戦国期の書かれたもの、文献・古文書からの考察とは異なり、むしろ遺跡、遺構、遺物から、この遺跡の特徴を明らかにしていこうとするもので、城跡の縄張論からの考究である。

中世山城は、山上に数百年間、ただ小さなヒトの営みによる改変と、自然の営みによる風化

作用で、変形、瓦壊、あるいは埋没しているに過ぎず、性急でない現地調査、四季を問わない繰り返しての観察、遺物の採集、あるいは草刈り作業、地形測量、多くの目を通しての論議などによって、その地での性急な発掘調査による「完璧」な情報よりも、遙かに将来に展望を持つ研究と成果が得られるといった性格のものである。

その意味でもまだまだ鎌刃城へは足を運ばなければならないが、さらなる展望と先達の大方の御批判を仰ぐために、現在の到達点を書き綴ることとした。

1. 湖北の山城の中の鎌刃城—詰城と境目の城—

山城は大きく分けて、3種、小さく見ると8種ある。その代表的なものがa) 詰め城・詰城である。山下、平地には厳然と在地領主を務める「お館様」の住まいする平地城館・「館城」が築かれ、それは土塁や濠を巡らしていざと言った時に備えての防備がなされている。そして、その背後の山頂には「世の中が物騒な折」に、つまり戦が始まると、籠城し、展望の利くこの城を戦略に用いるのである。平地の城館とセットとなった背後の逃げ城これが詰城である。

その代表例に、京極氏の山城・上平寺城がある。もちろん山下にも上平寺城下の遺構が認められている。また、浅井氏の小谷城も上平寺城とはやや異なるものの、この種遺跡の代表格とってよい。その相違は、小谷城に城主の居住性が認められることである。つまり数少ない居館型あるいは居住性ともいべき山城と目されることである。

ここでは後論との関わりで、便宜上小谷城をa-1とし、上平寺城をa-2と類別しておきたい。

次に挙げ得る山城が、さきに触れた境目の城である。陣取り合戦の対象となった両勢力の狭間にある山城、これがb) 境目の城、国堺の城である。この山城にも山下に「山もり」が、館を築く例がある。「如意ものがたり」に記載された米原町の太尾山城などもその一例で、山麓に、今井氏の支流にあった岩脇氏の祖が屋敷を構えていたようである。

確かに形態的には、背後の山城と対になるように、その前面平地には館として住いが築造されており、あたかも詰城と城館といった関係が想定される。が、この場合は、「山もり」が、在地の最強の領主でもなければ、山城を築いた当事者・主体でもない。ここ太尾山は、浅井氏の有力な被官である今井氏のそのまた被官であったさきの岩脇氏が、おそらく今井氏からの命で、この山城の守りを命令され、山下に居を構えたものである。ゆえに山下の住いとはいえ、在地領主が館を築いたのとはかなり趣が異なる。

湖北の境目の城の代表例は、近江と美濃、滋賀と岐阜の両県にまたがる野瀬山城やこの坂田犬上両郡境に築かれた佐和山城などがある。

なおこの境目の城と類似したものに、c) 支城がある。領域支配に力を入れるために、また領内有力土豪の謀反を未然に防ぐために、そしてまた重要な役目に、境目の城との通信・連携

のための中継施設がある。要所要所に山城を築き、領域支配を貫徹したのである。湖北のその典型は長浜市と山東町にまたがり、臥竜山の高峰に築かれた浅井氏の支城である横山城にみることができる。

d類は、出城である。山城・詰城の防御を固めるために主郭群と防御遺構から構成された城主の立て籠もる城とは別個に、戦略上近接して築かれたものである。その代表的なものは小谷城の出城としての丁野山城や中島城が知られている。

e類の城は、付け城と称されるものである。敵対勢力の拠点とする山城を攻略するにさいして、作戦上設けられた山城・砦であり、敵城の足下あるいは眼前や背後に、至近距離で設けられたものである。小谷城に対する信長の虎御前山城などが著名である。

f類の城は、在地有力土豪が築いたもので広義の「詰め城」とし得るものである。つまり、戦闘の結果、あるいは経過によっては詰城ともなりうる契機を含んでいた山城である。主君を寝返り、反旗を翻した証しとして、権力奪取のための拠点とした山城である。その典型は、磯野氏の磯野山城であり、そして浅井氏の小谷城も例外ではない。前者は京極氏の懐刀であった上坂氏が病に倒れた直後に、江北を支配下に治めようと目論んだ磯野氏が主力となって築造した山城である。一方後者は、その磯野氏等の動きから、反逆者への天誅として、また京極氏への忠臣としての名目で挙兵、築城したものであった。磯野氏の動きを契機に、浅井氏もまた京極氏打倒を胸に収めての軍事行動であったとみたい。つまり、この括弧付き「詰城」は、平地の城館の有無ではなく、有力土豪の連合、もしくは有力被官層による下剋上に際しての軍事施設なのであり、反旗の旗印でもあった。このf類をここでは「狭義の詰城」とする。

しかし、さきにも触れたように、この狭義の詰城において、目的の下剋上を果した時、その築城主体者が、その後の領域支配にこの一時的山城を長期の詰め城として用いるようなことがあるれば、この山城はf類からa類に変わることになる。このf類からa類への転換のなされた典型的山城が小谷城なのである。

g類は、ここでは扱わないが、湖北北部の山間で、秀吉と勝家とが対峙し、雌雄を決した賤ヶ岳合戦の繰り広げられた際に、余呉町から一部木之本町にかけて両軍によって築かれた多数の山城群である。

また、h類は、これもここでは論外とするが、民衆の城ともいえるべき、一向一揆ともかかわる民衆が立て籠もった山城である。その代表は近江町の日撫山・顔戸山城である。梯郭式となって頂部から下降する山尾根上に幾段もの平坦地が築かれる。しかし、堀切や堅堀、切り岸もなく、土塁や横堀もない。山城か否かの判断さえも困難な程防御施設、つまり城構が見られない。

以上のように山城は湖北では8種認められるが、鎌刃城との関わりのある山城は一体どの城なのであろうか。文献で見る限り鎌刃城は、境目の城として機能し、またそれがゆえにこの城の「やまもり」ではなく真の支配者は幾度となく変転してきたと言える。この小論で明らかにしようとする鎌刃城は、その築城当初に遡っての創建主体者であり、その意図と契機について

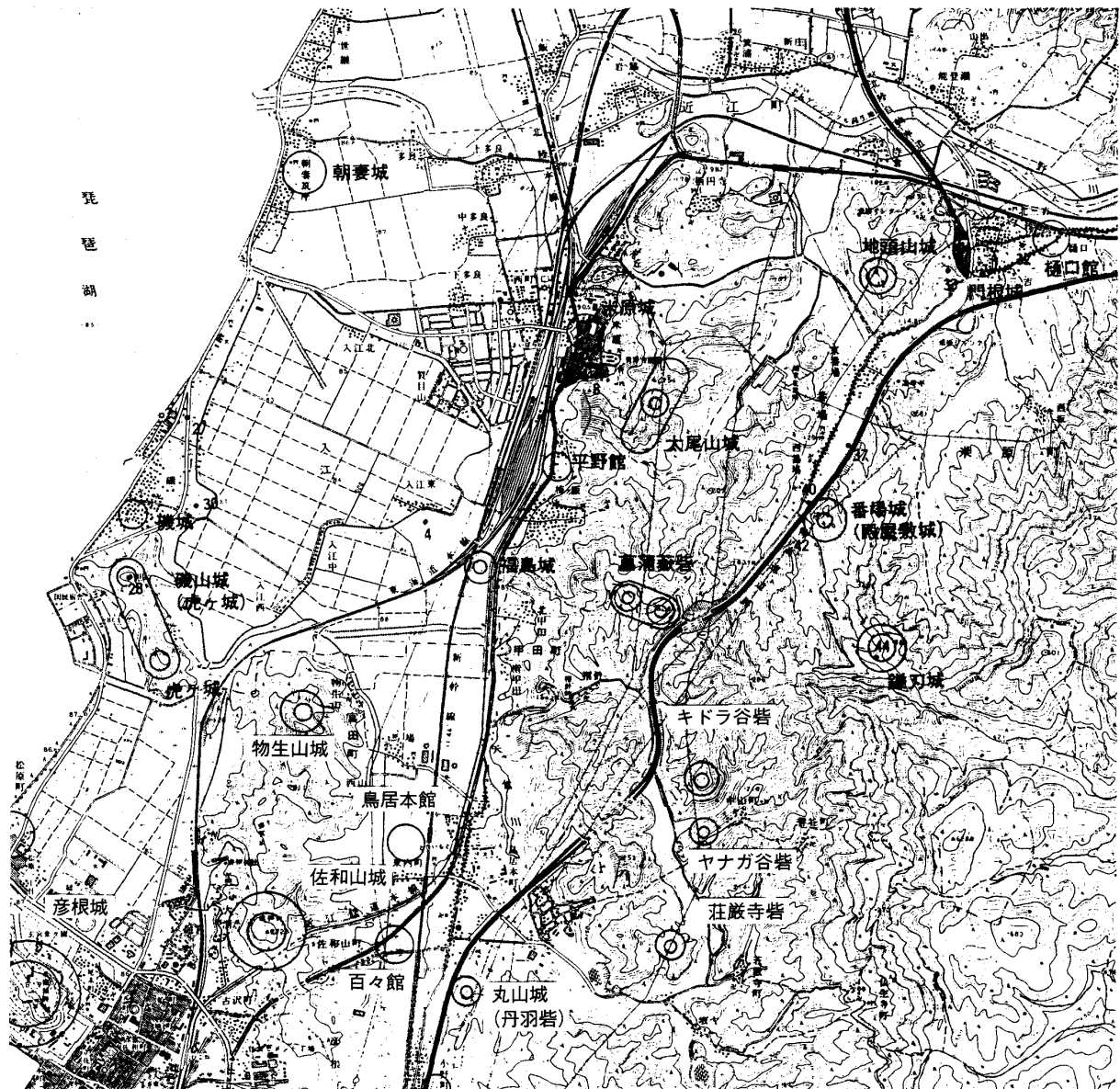


図1 鎌刃城付近城館分布図 (依『滋賀県中世城郭分布調査5』、『同6』1987, 1989, 滋賀県教育委員会

である。

2. 湖北の山城における縄張構造・城構

湖北の山城は、その縄張構造・城構の形態からみて、大きく3種がある。

a)は、山城の典型とされる、梯郭式と呼ばれるものである。尾根筋の頂部から先端部にかけて郭が階段状に前後に並び、郭群の前後を堀切・堅堀、左右を切岸でもって要害とするものである。もちろん左右の斜面は切り岸や帯郭が築かれている。前面には堀切・堅堀、あるいは切り岸で敵兵を遮蔽する。背面・背後は執拗なまでの堀切・堅堀で構える。小谷城や鎌

刃城あるいは磯野山城や上平寺城はその典型である。

b)は、さきの山城同様に尾根筋や山丘上に立地するものであるが、方形の郭とその外縁をなす土塁と切り岸、あるいは犬走りからなるもので、時期が下ると横堀が加わる。いわば「方形単郭土塁（横堀）形式」と呼称するものである。その代表的なものは野瀬山城、太尾山城、あるいは横山城や丁野山城などである。小谷城内の福寿丸、山崎丸などもこの種のものである。

c)は、尾根筋には立地せず、山腹斜面に位置するもので、かつ先行して造営されてきた寺院を転用、改修して築いた山城である。その典型は京極氏の弥高百坊城であり、また六角氏の観音寺城がそうである。

この選地・立地と山城の性格とは必ずしも一致しないが、湖北ではb類は支城、出城、境目の城に多い。時代的傾向と性格に関連しているようである。

a, c類はともに湖北でいえば、規模も大きく、かつ広義、狭義の詰めの城の性格を持つ。磯野山城、小谷城、弥高百坊城しかりである。問題はa類に属する鎌刃城をどのように位置づけるかである。

はたして鎌刃城は詰城か、それとも境目の城として築造されたものなのか、あるいは支城であったのか。この類別の中でも最も問題となるのである。

同様な研究上の位置を占めた磯野山城が、数少ない文献の中で、磯野氏の動向と関連づけて説明可能であったことと比して、鎌刃城の性格付けは、どのようなものになるであろうか。

3. 鎌刃城の特質

鎌刃城の特質は、地理的に見て、湖北と湖東、坂田郡と犬上郡との境にあって、その山塊に立地するとはいえ、前面には中仙道を、そして天野川を見下ろす要衝の地であった。当時15から16世紀にかけては、北に京極、南に六角と近江の二大領主である半国守護が支配権を握っていた。このような交通上の立地がこの山城築城の大きな第1の特徴として指摘し得る。

さらに、第二の特徴として把握し得ることは、この山城が梯郭式の形をとることであり、しかもその規模は尾根筋の郭群を含めた前後の堀切までの間が全長250m前後を測る大規模なものであることである。特にその規模は、県下の山城中、梯郭式山城の中では、小谷城に次ぐもので、京極氏の上平寺山城を上回る規模である。ゆえに本格的な山城としては県下で二番目に大きなものであることになる。もちろん、寺院の転用、拡張による「二義的山城」＝「寺院転用型山城」を除外してのことである。

ちなみに小谷城の規模は、小谷城尾根筋上でのそれが金吾丸から山王丸までの間が800mであるから、鎌刃城の4倍におよぶことがわかる。

第三の特徴は、石垣の存在である。山城にはしばしば石垣や石積みの城壁あるいは石塁が認められるが、普遍的かといえれば決してそうではない。著名な城郭に城壁を持つものが多く、

その結果生まれたイメージにすぎない。

近江で見れば、信長侵攻以前の山城で石垣をある程度備えたものといえば極一部である。

代表的なものは、六角氏の観音寺城と浅井氏の小谷城である。県下で、寺院転用型山城を除くと小谷城について著しい石垣の使用は鎌刃城ということになる。梯郭式の形式をとる高島郡今津町伊井山城や伊香郡磯野山城あるいは近江八幡市岡山城なども石垣の使用は無い。

つまり、鎌刃城は要所要所に石積みの城壁とも言うべき石垣を普請しており、この山城の特質に数え得るのである。県下の山城の中で、城壁もしくは石塁、石垣を備えたものはほとんど無く、湖北でも小谷城以外には無い。もちろん、寺院転用型城郭や信長が近江へ侵攻してから以後のものを除外しての話である。さもなくば、信長の天津市宇佐山城は城壁を一部備えるし、安土の観音寺城も石垣と石塁が巡っている。

さて、鎌刃城は石垣を要所要所で用いており、この点でも小谷城と相並ぶ特質を持つといえるが、その実態はどうであろうか。

石垣の築造技法などについては別稿にゆずるが、その配置は、尾根筋頂部の中心主郭をなす多角形の平面のその切り岸に城壁として認められている。尾根筋先端の竪穴状郭の南斜面では郭の面積を確保するといった本来の意味よりか、切り岸の崩壊、土石流の災害を考慮しての、二段構えのものであった。山麓河川での二次災害の防止を意図したものと見受けられた。地元に対する城主の配慮が伺われるのである。

切岸斜面の保護といった観点では小谷城においても例外ではない。またその中心郭の虎口からみた正面における石垣は、両城に相通じるものがある。つまり、化粧石的側面の存在である。

山城に戦闘機能以上に威厳、荘厳さを誇示しようとする部分が大いのではないかと思わせる。

第四に、この鎌刃城では、これも小谷城と類似するが、尾根筋をさけて、その北側山腹に山城に平行しての山道が認められることである。問題はこのことに止まらず、この山道が尾根筋からの登城路に分岐し、その地点には番所を示す平坦地がある。

また、中心郭群の城門へ至る大手は、この山道から少し引き返すようにして山腹を上るもので、やはり山道とは無縁ではない。しかし、この山道はさらに鎌刃城の背後を巡って武奈方面へ至る要路として通じている。問題はこの城を完璧なものとするためには、この山道を城の側面に設けられた幾条かの竪堀によって切断することであったが、まったくその様子が伺われないうことである。つまり、この山城はこの山道の存在を無視し得ないものであったことを物語っているといえる。ある意味では、この山道の保護もまた、この鎌刃城の重要な機能にあったのではないかと思いたくなる様相を呈した。

民衆の生活路としての山道ばかりではなく、霊仙山の懐深く、さらには湖東や伊勢、美濃へ繋がる間道でもあったことも加味せねばなるまい。天野川流域と中仙道にかかわる商人や在地の土豪、農民と深く関わった山城との評価が必要とされるゆえんでもある。

さらに第五に、この鎌刃城にとっての特異な点は、背後に築かれた最後の堀切の東方、およそ直線距離にして100mに、清竜滝があり、溪流が流れるが、この滝の落ち口に、岩盤をくりぬいて設けた水路の跡とその先の樋をジョイントする取水口＝水の手箇所が発見されたことである。

本来山城は水の不便な所が多く、背後の谷水を引水出来る条件は無い。それが可能な地形をとるところに鎌刃城の立地の特色もあるわけであるが、それにしても、登城に際してそれぞれの兵が、腰に竹筒をぶら下げることで事足りたはずである。しかし、籠城にさいしての水は不可欠のものである。ただ、背後の水源では毒を盛られる危険性も大きく、城内に石積みの柵溜をもうけ天水は背後のわずかな高みからしみ出す水を大事に確保することが本来のものであった。にもかかわらず谷川に水源を求めたのは、平時での居城に際しての水確保に意図があったのではないかと考えられる。

このことと符合して、この城内にこれまで柵溜が発見されておらないことは示唆的である。引水可能により柵溜など不要であったのではないか。

これまで全般に関わる城の特徴を記載したが、さらに縄張りに関する子細な特徴をあげてみたい。

4. 縄張の特徴

番場に近い尾根筋の先端寄りの遺構から山城の特徴を解説する。

a) 前面の城郭遺構について

狭義の鎌刃城の最先端の堀切は、堀底に土橋が認められ、外部と内部の連絡を可能としており、構えの上ではこの堀切が城の西端と言い難いところである。この疑問は、この堀切に堅堀が付随しないことである。外部勢力の防御は尾根筋のみではなく斜面にも必要であるが、背後の幾重にも施された堀切・堅堀にみる険しさとは裏腹で、切り岸も無いことに注意したい。城構に緊張が無いのである。

同様のことは大堀切にも堅堀がなく、むしろそれは堀底道であって、兵の溜まり場である。しかもその手前西側の高まりは北側が窪んでいるものの決して堀り割られている様子はなく、幅広い通路である。

この尾根筋を大きく堀り切った前面の大堀切の斜面には斜めに通路があって「前面帯郭」から「地下式遺構」へと通じている。最も大事な大堀切のこの点も堀切道としての機能を明示するものでしかない。

これらのことから、中心郭群の前面をなす遺構群の縄張りが、狭義の山城の形式的な城構えに則ってのものであったことが推測できる。

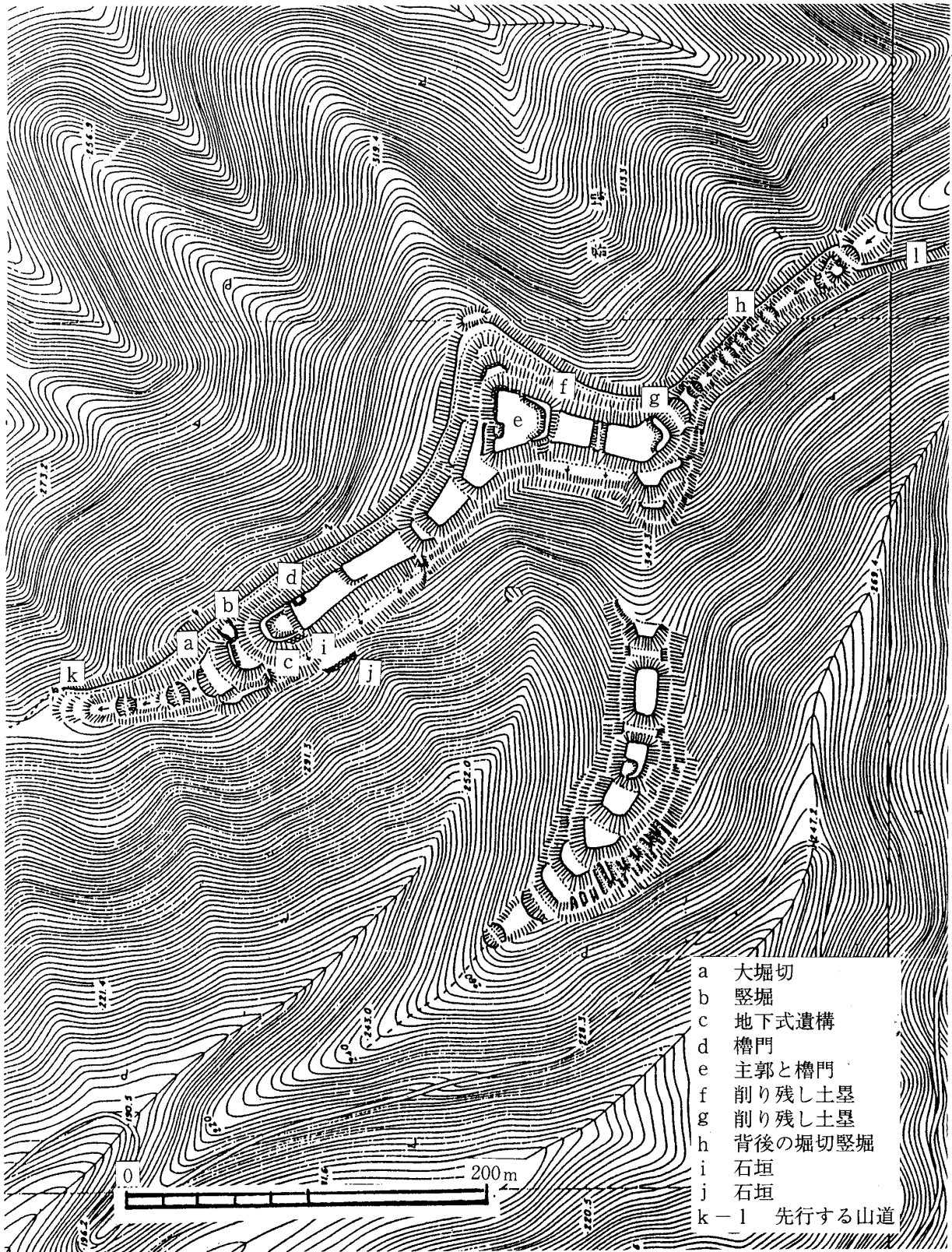


図2 鎌刃城略測図 (依『滋賀県中世城郭分布調査6』1989, 滋賀県教育委員会, 一部改変)

b) 堅穴状郭について

ブッシュの繁る当初は、巨大な狼煙台ではないかと思えた。しかし、子細にみると、灰の掻き出し口が無く、しかも内部がすり鉢状に窪んでいる様子も無いので、不可能と見た。しかし、一見土塁で四方が囲まれているかに見えるが、重要なことは、この尾根筋を方形に掘り窪めたものであって、いわば三方は削り残しの土塁で、一方は尾根の切り岸からなる。しかも、四方の切り残された壁には外部への通路がなく、実に奇妙なものである。郭の面積は9 m四方に満たない。

しかし、これに類する遺構は、すでに比叡山の白鳥越遺跡群、つまり浅井・朝倉連合軍が築いた、信長と対峙しての山城群中に多数見受けられるものである。しかし、これほど大きなものはなく小さい。また小谷城にはこれほど完全なものはないが三方が削り込まれた穴倉様地下式遺構がある。

しかし、県下ではその他の地域では類例はない。比叡山と小谷城に存在することは浅井・朝倉氏との関連といえるが、鎌刃城のそれが両者よりも立派で、かつ先行する可能性のあるところに問題がある。

おそらく、削り残した堅穴の外周高まりに軒先を掛けるようにして屋根を設けた兵士の住まいであろう。あるいは内部は兵の立て籠もる場であったのだろう。

c) 前面横位帯郭切岸二段構^{かまゑ}構造について

さきに小谷城址の研究(2)で指摘した¹⁾ところであるが、小谷城の大堀切の背後や金吾丸の前面で認められた。鎌刃城のそれは、堅穴状遺構の前面・西側の大堀切との間に設けられたものである。大堀切の斜面を斜めに通路が上る行き先がこの帯郭である。尾根筋に直交して配置され、大堀切に面してやはり削り残しの低土塁が認められる。この帯郭の北端には堅堀が築かれている。

このような遺構は類例も少なくこれまでに唯一小谷城で認識し得たものである。

d) 大手門と主郭門について

これまでは内柵型として考えられてきたようであるが、幅5 m、奥行き5 mの方形の平坦部から三方に4段前後の石段が設けられており、郭に至るゲートであって、階段で北へ十数段下ると右手へ取って山道・登城路に至るのである。この平坦部は内開きの城門が取り付く箇所、左右には櫓が設けられたと推定しておきたい。主郭の門もまた、幅3 m前後もあって正面の階段に達するもので、やはり櫓門であった可能性を残しておきたい。

このような類例も山城のなかにはほとんど無く、かろうじて小谷城の黒金門と京極丸の入口に櫓門が想定される。黒金門の階段の幅は5 mを測るものである。

山城になぜこのような巨大な城門が設けられたのか、小谷城の実態から判断すれば、この鎌刃城もまた、単なる山城ではなく、城主が居城した、居城型山城ではなかったかということになる。

一つ懸念されることは、梯郭式山城にあっても、寺院転用型山城の可能性が払拭できないことである。弥高百坊城や観音寺城だけが転用型ではないからである。この問題は鎌刃城のみではなく、小谷城においてもしかりである。

ただいま言えることは、山寺の遺物など、特に五輪塔やその他の石塔類が見られないといった消極的理由でしか説明できない。それも山下へ移し得たとすればもはや拠り所はなく、ここではこの問題は今後の課題とした。

以上のように、幾つかの縄張り構造に関してその特徴を見てきたが、その多くの点で浅井氏の小谷城と類似することに気付かされた。次に小結をかねて鎌刃城の総構えを論じておきたい。

4. 鎌刃城総構

先に鎌刃城について、その前面の堀切、あるいは大堀切に、山城の前面を意識しての緊張が足りないことを述べた。背後の多条の堀切、堅堀の様相と異なるのである。この点についても、小谷城との比較において解決の糸口がある。

小谷城の中心尾根筋の郭群は、一端金吾丸で納まるが、かなり離れて出丸が築かれている。その間の距離はおよそ1.3kmを測る。別個の城ではないかとの疑問も沸く。しかし、重要なことはその間に鞍部や尾根筋が続くが、両者を遮蔽する堀切などが全く認められないことである。しかも、金吾丸の前面防御は堀切もなく極めて弱い。つまり、金吾丸は前面を丘陵先端部の出丸に託しており、むしろ金吾丸から出丸は通路としての機能が重視されたかに見受けられる。

いま同じように鎌刃城を狭義の郭群から目を離し、丘陵の最先端まで広げてみればどうか。中心尾根筋を先端まで辿れば、ほとんど名神高速道路によって失われた一つの先端部の高まりが観察し得るが、そこにはまさしく堀切と平坦部からなる小谷城出丸相当部分があったことが判明する。しかも鎌刃城では、この新発見の出郭一か所のみではなく、やや南よりの尾根筋を下るとやはりその先端部高まりが名神高速道路によって削土されているが、先述のものほど失われてはおらず、ほぼ全容がうかがえるものである。この番場城はやはり平坦部と背後の堀切を備えたもので、明確な土塁が巡るものではない。これもまた出丸の公算は大きい。背後の堀切は形式的なもので、むしろ尾根筋道は主郭群との主要な連絡路を提供したに違いない。

以上によって細部はもとより遺跡の性格、さらには総構においても、両者は深く類似し、相互の比較によって相互それぞれの理解が深まるのではないかとの所感をもった。

なお、鎌刃城の大堀切と番場城との距離は直線にして、およそ750mもの間隔である。

はたして、疑問のあった鎌刃城の前面の構造についてもある程度の推測が出来た。総構えについても両者が類似するのである。

5. 鎌刃城の年代

一体鎌刃城と小谷城はどのような関連があるのであろうか。この問題を論じる前に鎌刃城の築造年代について見通しを述べておきたい。

鎌刃城の年代を決める重要なポイントは、その石垣の構築方法である。また、縄張りに関連しての土塁の構造である。さきに小谷城址の研究(1)で、土塁の築造と年代を検討した²⁾ことがあり、小論ではこの点のみ触れて、石垣については別途論じたい。

さて、その土塁であるが、鎌刃城では、土塁の構築は、先程触れた前面横位帯郭に伴う、大堀切の肩口に認められる高さ数十cmにも満たない低土塁が知れる。この帯郭が尾根の切り下げ・削平によって造出されているとともに、この平坦部が中窪みとなって土塁の高まりへと変換していくことから判るように、この土塁は削り出しによる構築で、盛り土によるものではないことが判明する。

そしてさきに述べた竪穴式遺構、あるいは地下式遺構は、一見土塁を四周に巡らしたものと見間違えるが、東側が斜面だけで高まりが無いことに気が付くであろう。つまり、この土塁は土盛りによるものではなく、削り出し、あるいは削り残したと表現すべきか、尾根筋上部を方形に掘り下げて、四周に高まりを残して土塁状の外観をなすものである。いわゆる土盛りによる土塁では無いのである。

他に土塁形状遺構の観察し得る箇所としては、中心郭、すなわち主郭とも言うべき、尾根上頂部に築かれた「天守」の位置に、郭を一部取り囲むように認められる。つまり土塁は郭の外周全面に囲堯するものではなく、東側、背後に面しての一部、尾根筋に交わる位置に観察できる。

おそらく旧山尾根の上部を削平して平坦地、郭を造成するに際して、東側を故意に削り残しておいて、土砂は西へ運んで平地を確保し、旧地形を生かして土塁としたもののようである。このため土塁・防御壁は尾根筋上部が高く、左右の尾根斜面へ移るにしたがい徐々に低くなっている。

土塁形状の箇所は、さらに背後の後部堀切群に面した最初の郭、西からいえば最後の郭のやはり東側に土塁が認められる。これもまた、山尾根筋上部の斜面を削り残したその結果として作られた土塁であって、盛り土ではもちろん無い。

このような土塁の特徴から、その位相を検討すると、次のように想定される。

つまり山城にみる土塁の概略を見通してみるならば、年代の新しいものから、a) 土塁はいずれも土盛りからなり、郭の四周を整然と巡るを通常とし、その土塁の幅はもちろん天場・上部の高さが一定であるもの。たとえば賤ヶ岳の合戦の折りの秀吉、勝家両氏の山城が指摘し得る。その虎口もまた内柵型を呈するものや食い違い虎口となって、土塁の上に櫓もしくは見張

り台の施設の予想されるものである。

b)これに対して、一時期遡るものではこの土塁が、その下幅や天場の高さに凹凸を持ち、整然としたイメージからほど遠いものである。しかし、その虎口は少し食い違いの様相をもち、土塁先端の上部には見張り台が設け得るようにその幅が広い。浅井、信長が敵対関係に入った頃の状況である。

c)さらに遡ると土塁は、郭の四周を完全に巡ることが無いばかりか、土塁の下幅や天場の凹凸が一層著しいものばかりである。小谷城の尾根筋の最西端にある出丸の内、東北に続くものがそれである。

d)もっと遡ると、山城の土塁はどうやら土盛りによるものばかりではなく、地山、旧地形を削り残して低い土塁形状を作る。近江八幡の水荃岡山城の山頂部郭がその類例である。また、この土塁は必ずしも四周を巡るものではない。小谷城の金吾丸もその例である。六坊にもその遺構がある。なお、郭を囲郭する土塁ではないが、磯野山城にも、堀切に沿って一見土塁と見間違えるような高まりがある。やはり堀切り後の処理の一種であろう。

今強いてこの三者に相対的な順序を求めるとすれば、1)土塁の認められないもの。2)見過るような切り残された土塁状高まりを持つもの。磯野山城。3)削り残しの土塁が一辺あるいは二辺の外縁を巡る郭。金吾丸、鎌刃城の主郭。4)凹凸の激しい、それでいて振幅の著しい、いかにも盛り上げただけと言った形状のもの。完全に四周を巡らないが、一見四周を巡るかに見えるものさえある。出丸東郭。5)整然とした土塁の巡るもの。が信長侵攻からそれ以前に認められるものである。しかし、その築造の年次は相対的であって、絶対的ではない。

ここで注意しておきたいことは、このような相対的年次とさらに加えて、別個の次元での、別個の系譜に繋がる土塁形状の存在することである。

その一つが山腹斜面を大きく削り残しての大規模な土塁状遺構である。おそらく平地の館や寺院遺構の大規模な土塁感覚を取り入れたものではないかと考えている。この種のことをB系統としておく。小谷城での京極丸の土塁、あるいは水荃岡山城での大規模な土塁状遺構がそれである。

そして、鎌刃城の堅穴状遺構、すなわち掘り込みによる一見土塁囲みを思わせる遺構をC系統としておきたい。その類似が小谷城の金吾丸前面の堅穴様遺構であり、比叡山白鳥越城郭群中の堅穴様遺構である。

こうした検討のなかで、鎌刃城には、寺院遺構を真似た土塁さえも全く無く、遺存するすべてが地山切残型土塁であった。

これらのことを加味すると、鎌刃城はその縄張りに関する限り古い当初のものをそのまま踏襲、使用していることに気付かされる。つまり文献に伺える浅井氏と六角氏の戦いや信長支配下での浅井氏と堀・樋口氏との戦いなど戦国末期に至るこの城での戦いなど、いずれも削り残し部分土塁の遺構年代との整合は認められない。

この点に関しても、小谷城から学ぶことが出来るように、あるいは磯野山城、あるいは今津町伊井城についても同様であるが、これら梯郭式山城は使用の上での大きな断絶の有無にかかわらず、基本的には古い縄張りを本格的に改修することはなかったようである。ただ、増築で新たな縄張りを取り入れるといったことは当然あったが、その改築が旧来の郭については容易に及ばなかったようである。つまり、小谷城は中心尾根筋上の中心郭群にあっては、ほとんど改修のなされた痕跡はなく、土塁の付設も基本的にはなかったのではないか。しかし、出丸の増築は、主郭に遅れるものであるし、さらにその西半分の郭については小谷城末期の新たな増築になる。おなじく山崎丸、福寿丸についても出丸の新たな増築であるが、広義の意味ではあわせて新築といえる。

小谷城においても中心郭群の改築は検証しにくいだが、同じ事は鎌刃城でも指摘し得る。

こうして鎌刃城の当初築造年代・創建期を求めるとすると、削り出し土塁を根拠にして、この城が小谷城よりもまだ遡る年代が予想されることはあっても、下ることは無いとみてよい。前面二段構えに見る大堀切内の斜め通路、横位帯郭の側面に設けられた堅堀、前面の低い削り出し土塁様遺構、そして完璧な堅穴状遺構、さらには今だ土塁挟みとならない虎口での櫓門など小谷城を遡る要素である。ただ、小谷城の黒金門および京極丸御門は後の増築部分の可能性があるが、それでもなお鎌刃城の二つの城門は先行するものに間違いはない。

小谷城は先の研究で予測したところであるが、京極氏の服臣上坂氏が没してのち、磯野氏の謀反が引き金となって浅井氏もまた築城した経緯があり、その限りでは1525年、大永5年ごろに築かれたものである。

この点から見て、鎌刃城は大永年間を遡る築造年次であることは確かであるが、しかし、それが同時期の範囲となるのか、十数年か、あるいは数十年のオーダーで遡るのか、定かではない。推測できることは、今津町伊井城が背後に堀切・堅堀を構えるものの梯郭となる各郭には囲堯施設が遺構としては認められないことである。つまり、形式学的にいえば、鎌刃城は伊井城に後続するものであって、その築城年次である1487年に遅れるものである。

鎌刃城の築城想定年代は、1487年から1420年代の間ということになる。

6. むすびにかえて—小谷城のモデルと鎌刃城の城主—

残された大きな課題は、一体この城は誰によって築造されたどのような性格の城なのかといった事柄である。

ただこれまでの想定から予測し得ることは、城自体が大規模で、総構えでは中仙道に面しての丘陵先端の出城までが包括されること、そして、主要郭も大規模で中心郭が存在すること、しかも水の手まで備えていること、土器の出土が予想されること、城門が大規模であってシンボリックであること、などから、この山城が単なる境目の城や支城で無いことが伺われる。つま

り城主が居城した居城型山城との予想がつく。ただその類例となれば少なく小谷城がそれである。小谷城は清水谷の遺構群があるが、福井県一乗谷遺跡のように城主の城館はここには無く、城主は尾根筋に常時住まいした可能性が強い。鎌刃城もその可能性が残る。

また城主を探るうえで考慮すべきことは、15世紀後半から16世紀初めにかけての鎌刃城の位置は、今だ磯野山城も小谷城も存在しない中であって、唯一の梯郭式山城であったことである。つまり、本格的な戦国山城で最大規模のものがここに存在したことである。

しかも、この山城の山腹を通路とする山道は、中仙道に面した蓮華寺の背後に繋がるものであって、この寺院と深い関係にあったことが判明する。この時期蓮華寺を支配した領主は誰かといった観点もまた鎌刃城の城主を考えるうえでの目安となるのではないか。

むすびにかえて指摘したいもう一点は、小谷城と鎌刃城との間に、あまりにも多くの類似点が見出だされることである。その個々は繰り返さないが、その背景には、浅井氏の築城に際して、この鎌刃城の縄張りがそのまま参考にされ、取り入れられたとしなければなるまい。そのような両者の接点はどこにあったのか、ここにもより明確に鎌刃城を解明しなければならない課題があるといえるのである。

註

- 1) 丸山竜平, 深貝佳世, 齋藤めぐみ「小谷城址の研究(2)」『名古屋女子大学紀要』第42号 1996 名古屋女子大学
- 2) 丸山竜平, 深貝佳世, 「小谷城址の研究(1)」『名古屋女子大学紀要』第41号 1995 名古屋女子大学

追記

現地の調査に際しては地元区長をはじめ区民の方々ならびに「明日を考える会」会長泉峯一氏には大変お世話になった。また、泉良之氏には現地調査において多くのご教示を得た。ご協力を下さった方々に心からお礼申し上げたい。